

複合動詞「一切る」の意味について

杉村 泰

1. はじめに

本稿は複合動詞「一切る」の意味について論じたものである。従来、複合動詞「一切る」には「切断」、「終結」、「完遂（完了）」、「極限（極度）」、「自信満々」等の意味があることが指摘されている。

- (1) 彼は固い肉を噛み切った。(切断)
- (2) 彼は彼女のことをきっぱりと思い切った。(終結)
- (3) 彼はマラソンで42.195キロを走り切った。(完遂)
- (4) 彼は過酷な労働により心身ともに疲れ切った。(極限)
- (5) 彼は自分の意見をきっぱりと言い切った。(自信満々)

しかし、これらの分類は「終結」と「完遂」の違いや「完遂」と「極限」の区別などが必ずしも明確ではなく、いまだ検討の余地があると思われる。そこで本稿では、本動詞「切る」の切断の意味が残っているかどうか、「～し切った」後に前項動詞で表される動作や変化が持続しているかどうか、「～し始め」てから「～し切る」までの間の状態を「～している」と言うかどうかといった基準によって、「一切る」は「切断」、「終結」、「行為の完遂」、「変化の達成」、「極限状態」の5つの意味に分類されることを指摘する。また、従来「一切る」はアスペクト表現の一つとして論じられることもあったが、本稿ではあくまでも当該の事態が100パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表す表現であることを主張する。

2. 先行研究

先行研究では複合動詞「一切る」を大きく2つに分け、「噛み切る」、「叩き切る」のように本動詞「切る」の持つ切断の意味を表すものと、「走り切る」、「疲れ切る」のように切断の意味が薄れ行為の完遂や状態の極限を表すものがあることを指摘している。

森田(1989)は「一切る」の意味を次の4つに分類している。しかし、㊦の「切断」の意味は他と区別しやすいものの、㊦～㊨の意味は終了意識と限界意識の違いが明確でなく恣意的な分類となっている。とは言え、「一切る」を終了意識と限界意識の2つに分けて考えるという発想は、「一切る」の分析に重要な示唆を与えている。

- ㊦ 先行動詞が、物を切る方法を表す動作動詞の場合。
「搔っ切る、噛み切る、食い切る、叩き切る、断ち切る、突き切る、ねじ切る、挽き切る、焼き切る」のように、“切り離す”行為そのものを表す。
- ㊧ 「切る」が“継続する事柄にけりをつけて終結する行為”を表すところから、他の動詞に付いた場合も、完全にその事柄を終える。“完了”の意となる。これは「打ち切る、思い切る」のような終止行為そのものから、「数え切れない、取り切れない、持ち切れない」「仕事が多すぎて期日までにはやり切れない」「読み切れない」と、多く打消表現となる。その他「やっと読み切った」「戸を締め切る」「戸がたて切ってある」など“全部すっかり……する”意識であるが、この意識はさらに“完全に……し尽くす”「売り切る、買い切る、貸し切る、借り切る、出し切る」のような“ストックを全部……する”意識へと広がっていく。
- ㊨ それ以上付け加える必要はない、これで完全だ、その行為を自信を持って行うのだという、強い言い方となる。「はっきり言い切った」「思い切って行う」「警視庁では犯人逮捕に踏み切った」のような語を造る。
- ㊩ 終了意識が、それ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、“非常に”“完全に”の意を添えることにもなる。「みなを反対を押し切って強行する」「困り切る」「澄み切った秋空」「煮え切らない態度」「苦り切る」「張り切る」「冷え切った愛情」「……の噂で持ち切っている」「弱り切る」「分かり切った話」「彼は西洋流に割り切っている」

(森田 1989:380-381 をまとめた)

グループ・ジャマシイ（1998）は学習用辞典なので詳しい記述はされていないが、次のように「一切る」を大きく「完了」、「十分」、「切断」の3つに分類している点で森田（1989）と共通している。ただし、森田（1989）と違い「言い切る」を「十分」に分類し、「思い切る」を「切断」に分類している点で特徴がある。「言い切る」や「思い切る」の位置付けは研究者によって異同が大きく、これらの位置付けを定める統一的な説明が必要である。

- 1 <完了> 「最後まで…する」「…し終える」という意味を表す。
お金を使いきってしまった。(山道を登りきった、冒険小説を読みきった)
- 2 <十分> 「十分に…する」「強く…する」という意味を表す。
無理な仕事をして疲れきってしまった。(分かりきったこと、情景を十分に描ききっている、自分が正しいと言い切った)
- 3 <切断> 切断するという意味を表す。そこから、捨てる、あきらめるという意味にもなる。
大きな布を二つに断ち切った。(彼女のことを思い切る、思いを断ち切って出発した)
- 4 きれない 「完全に…できない」「十分に…できない」という意味を表す。
それはいくら悔やんでも悔やみきれないことだった。(あきらめきれないつらい思い出)

(グループ・ジャマシイ 1998:99-100 をまとめた)

姫野（1999）は「一切る」を本動詞「切る」の意味で用いられる語彙的複合動詞と接辞的に用いられる統語的複合動詞に分類し、後者をさらに継続動詞について行為が完遂することを表すものと瞬間動詞について極度の状態に達することを表すものとに分類した。これは森田（1989）に比べて分かりやすい分類である。しかし、同じ行為の遂行を表す表現でも「(難局を) 乗り切る」が「終結」で「耐え切る」が「完遂」と分かれていたり、「割り切る」と「諦め切る」が「終結」にも「完遂」にも属していたりするなど、分類にはいまだ検討の余地がある。姫野（1999）は前項動詞が継続動詞の場合は「完遂」、瞬間動詞の場合は「極度」としているが、継続動詞と瞬間動詞の区別は容易ではなく、なぜ「なる」が継続動詞で「伸びる」が瞬間動詞なのか説明が難しい。

A 語彙的複合動詞

1. 切断

「切る」が物理的切断を表す場合

鉄棒を焼ききる（搔ききる、食いきる、叩ききる、断ち切る、突っきる）

2. 終結

「切る」が抽象的な事柄を対象とする場合：人が目的を完遂するため、余分なことは切って捨て、決断したことに踏み出すという意味を持つ。

難局を乗りきる（振りきる、思いきる、踏みきる、言いきる、寄り切る、押し切る、諦め切る、割り切る）

B 統語的複合動詞

1. 完遂

行為の単なる終了を表すのではなく、行為者の予定どおり（質、量ともに）完全に行われることを表している。

自動詞：走りきる、変わりきる、耐えきる、燃えきる、なりきる、出きる

他動詞：食べきる、使いきる、読みきる、貸しきる、隠しきる、描ききる

2. 極度

その変化が進み、それ以上はないというほどの究極まで達することを表す。

[自然現象] 荒れきる、枯れきる、乾ききる、腐りきる、沈みきる、伸びきる、煮えきる、衰えきる、澄みきる、暮れきる

[生理的現象] 疲れきる、やつれきる、飢えきる、酔いきる、冷えきる、うだりきる、ほてりきる、弱りきる、なおりきる、やせきる

[感情や精神の働き] 困りきる、慌てきる、憎みきる、諦めきる、忘れきる、分かりきる、頼りきる、張りきる、信じきる、割りきる

（姫野 1999:175-182 をまとめた）

李（1997）は「一切る」を前項動詞と後項動詞に分解し、(6)のように「切る」を除去しても成り立つものを統語的複合動詞、(7)のように「切る」を除去すると成り立たないものを語彙的複合動詞として区別した。前者は前項動詞の意味から全体の意味が理解しやすいのに対し、後者は前項動詞の意味を知っているだけでは全体の意味を把握しにくく、「～し切る」全体で意味を記述する必要がある。そのため、辞書編纂や日本語教育に役立つ分類となっている。

- (6) a. 疲れ切って、とぼとぼと家へ向かって歩いている。(李 1997 の例文(27))
 b. 疲れて、とぼとぼ^{ママ}家へ向かって歩いている。(李 1997 の例文(27'))
- (7) a. 母親の熱心な後押しが押し切ったのである。(李 1997 の例文(30))
 b. ?母親の熱心な後押しが押したのである。(李 1997 の例文(30'))

李 (1997) は前者をさらに「物の切断」、「完遂」、「極限」、「自信満々」に分類している。これも日本語教育上分かりやすい分類である。しかし、「自信満々」という項目は些か主観的な分類である。李 (1997) は「自信満々」の「一切る」には限界らしいものが見つけにくいとしているが、いずれも思い余すことなく当該行為を完全に行うという意味を持っており、その程度が限界に達していることを表している。したがって、「自信満々」の「一切る」は「極限」の中に含めて考えられる。

二つの動詞に分解可能な場合 (統語的複合動詞)

- ・【物の切断】 前項動詞は切断の方法を表わす
 噛みきる、挟みきる
- ・【完遂】 「動き」の展開過程が完遂の終わりの段階を表わす
 上り切る、下り切る、走り切る、出し切る
- ・【極限】 その限界に達しているという段階的な変化を表わす
 没落し切る、疲れ切る、退屈し切る、弱り切る
- ・【自信満々】 限界らしいものを動詞句の中で見つけることが困難
 言い切る、演じ切る、諦め切る、断り切る

二つの動詞に分解不可能な場合 (語彙的複合動詞)

- ・【語彙化】
 突っ切る、振り切る、割り切る、打ち切る、押し切る、煮え切る、張り切る、
 乗り切る、踏み切る、思い切る

(李 1997:224-230 をまとめた)

以上、「一切る」に関する先行研究について見てきた。次にこれらの先行研究の記述を受けて本稿で考える「一切る」の意味について論じる。

3. 「切断」、「終結」を表す「一切る」

先行研究でも論じられてきたように、複合動詞「一切る」は本動詞「切る」の持つ「切断」の意味から考えることができる。まず、冒頭の(1)～(5)の例について、李(1997)とは逆に前項動詞を省略しても文が成り立つかどうかを調べてみる。その結果、次の(8)～(12)のように「噛み切る」と「思い切る」は前項動詞を省略しても文が成り立つのに対し、「走り切る」、「疲れ切る」、「言い切る」は前項動詞を省略すると文が成り立たないことが分かる。

- (8) 彼は固い肉を (~~噛み~~) 切った。
- (9) 彼は彼女のことをきっぱりと (~~思い~~) 切った。
- (10) *彼はマラソンで42.195キロを (~~走り~~) 切った。
- (11) *彼は過酷な労働により心身ともに (~~疲れ~~) 切った。
- (12) *彼は自分の意見をきっぱりと (~~言い~~) 切った。

このことから、前者の「一切る」は本動詞「切る」の持つ切断の意味が前面に出た表現であるのに対し、後者の「一切る」は切断の意味があまり感じられず、前項動詞の意味を強調する接辞化した表現であることが分かる。後者の「一切る」については次の4節で論じることにして、本節では前者の「一切る」について論じることにする。

前者の「一切る」はさらに「噛み切る」のように対象を物理的に分断する「切断」の意味と、「思い切る」のように事態の継続を中止する「終結」の意味とに分けられる。まず、「切断」の「一切る」は本動詞「切る」の持つ切断の意味が前面に出たもので、前項動詞で表される手段によって対象を物理的に分断することを表すものである。これには「噛み切る、食い切る、叩き切る、振り切る、(首を)締め切る、(枝を)打ち切る、(鼻緒を)踏み切る、(稲穂を)押し切る、(布・退路・補給路を)断ち切る」などがある。「風を突っ切る」も実際には風は切れないが、あたかも切るようにして進むという意味なので「切断」の「一切る」に含めて考えられる。

一方、「終結」の「一切る」は前項動詞で表される行為によって事態の継続に区切りをつけることを表すものである。これにはまず「(敵の補給・連絡・悪循環(の流れ)を)断ち切る」のように「切断」の「一切る」と「終結」の「一切る」の両方にまたがる表現がある。補給や連絡や悪循環はモノではなくコト

であるが、その流れの道（モノ）を絶つことはその流れ（コト）が途絶えることにつながる。ここから「流れの道を絶つ」→「流れが途絶える」→「行為の継続が中断される」というように「切断」の「一切る」から「終結」の「一切る」へと意味がつながる。「終結」の「一切る」には、「(奨学金 (の授与)・番組 (の放送) を) 打ち切る、(申し込み (の受付) を) 締め切る、(敵 (の追跡) を) 振り切る」のようにそれまで続いてきた事態の継続に区切りをつけることを表すものや、「(彼の才能を) 見切る」のようにそれまで抱いてきた期待を諦めてもう見込みがないと判断することを表すもの、さらには「(未練・思いを) 断ち切る、(恋人への思いを) 振り切る、(彼のことを) 思い切る、(仕事は仕事と) 割り切る」のように未練や躊躇を切り捨てて後に残さないことを表すものがある。

このうち「思い切る」は、躊躇しないという意味から「思いっきり遊ぶ」のような「思う存分」の意味を表す副詞用法が派生し、未練や躊躇を切り捨てるのに決意を持ってするということから「思い切って告白する」や「思い切った行動に出る」のような「決断」の意味を表す副詞・連体詞用法が派生する。

また、「踏み切る」には「鼻緒を踏み切る」のような「切断」の意味のほか、「踏み切り板を踏み切る」のように跳躍の際に地面を思いっきり強く踏んで飛び上がることを表す用法がある。後者の「踏み切る」は水平方向の運動を垂直方向の運動に変える行為であり、そこにそれまでの流れに区切りをつけるという意味が生じる。そこから「(強制捜査・強行採決に) 踏み切る」のようにそれまで続いてきた事態の継続に区切りをつけ、(強引に) 次の段階に踏み出すことを表す「断行」の意味が派生する。「断行」の「踏み切る」は「～に踏み切る」のように対象となる事態を二格で表されるという点で、対象をヲ格で表す他の「一切る」とは異なっている。

なお、以上の「一切る」のうち「突き切る」、「振り切る」、「割り切る」、「打ち切る」、「踏み切る」、「思い切る」などは前項動詞の意味を知っているだけでは全体の意味を把握しにくい表現である。これらは李 (1997) の言う「語彙化」した表現であり、辞書には個別に意味を記述しておく必要がある。

4. 接辞的な「一切る」と動詞のアスペクト

次に先の(10)～(11)の「走り切る」、「疲れ切る」、「言い切る」のような接辞的な「一切る」の意味について見ていく。これらの「一切る」は従来「完遂 (完

了)」もしくは「極限（極度）」を表すものとして、アスペクト表現の中に位置づけられてきた。しかし、「ズバッと言い切る」、「湖が澄み切る」などはその事態の程度が極めて高いことを表しこそすれ、時間的的局面を表しているとは考えにくい。「*ズバッと言い終わる」、「*湖が澄み終わる」とは言えないことから、「一切る」はアスペクトとは別に扱ったほうがよいと考えられる。そこで本稿では、これらの「一切る」は当該の事態が 100 パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表す表現であると考えられる。事態が 100 パーセント達成するまでには時間的推移を伴うのが普通であるため、「一切る」はアスペクトと密接に関わってくる。しかし、「一切る」自体はあくまで事態が 100 パーセント達成することを表すと考える。

姫野 (1999) はこれらの「一切る」について前項動詞が継続動詞の場合は「完遂」の意味になり、瞬間動詞の場合は「極度」の意味になると述べている。しかし、継続動詞と瞬間動詞の区別は実際には容易ではない。そこでまず「一切る」について分析する前に動詞のアスペクトについて整理しておく。

杉村 (2007) でも論じたように、金田一 (1950) をはじめ一般に動詞は継続動詞と瞬間動詞に分類されることが多い。しかし、いわゆる継続動詞の「食べる」は(13a)のように動作を継続的に続けることもあるが、(13b)のように瞬間的に動作を終えることもある。たしかに「食べる」は食べ続けようと思えば食べ続けられるという意味では継続動詞かもしれないが、見方を変えて一口一口瞬間的に食べる動作が繋がったものであると考えれば瞬間動詞であるとも考えられることも可能である。

(13) a. 彼は夕食を2時間で食べた。(継続的出来事)

b. 彼は刺身を一口で食べた。(瞬間的出来事)

一方、いわゆる瞬間動詞の「諦める」は(14a)のように瞬間的にその気持ちになる場合もあるが、普通は(14b)のように諦め始めてから完全に諦めるまでにそれなりの時間が費やされる。たしかに「諦める」において未練や迷いの気持ちを完全に捨て去るのは最後の瞬間かもしれないが、見方を変えて諦めの気持ちが生じてから完全に諦めるまでに至る過程が継続すると考えれば継続動詞であるとも考えられることも可能である。

- (14) a. 彼は合格発表を見た瞬間にあっさり大学進学を諦めた。(瞬間的出来事)
 b. 彼は彼女のことを2年かけてようやく諦めた。(継続的出来事)

したがって、本稿では動詞を「継続動詞 vs. 瞬間動詞」の対立ではなく、奥田 (1977) の言うように「動作動詞 vs. 変化動詞」の対立として捉えたほうがよいと考える。これについては次に引用する定延 (2005) の「逸脱仮説」が説得的である。

逸脱仮説：

「動作とは、当該のモノのデフォルト状態からの逸脱であり、これを表すのが「動作動詞」である。変化とは、当該のモノの直前状態からの逸脱であり、これを表すのが「変化動詞」である。つまり動作も変化も基準からの逸脱であり、両者の違いは、基準が「当該のモノのデフォルト状態」か「当該のモノの直前状態」かの違いである」(定延 2005:2)

この「逸脱仮説」は本稿の「一切る」の分析にも有効な考え方である。すなわち、「食べる」は「食べていない→食べている→食べ切る→食べていない」という過程をたどり、食べ切った後には元の食べていない状態に戻るため「動作動詞」に分類される。一方、「諦める」は「諦めていない→諦めようとしている(まだ諦めていない)→諦め切る→諦めている」という過程をたどり、諦め切った後に諦めの状態が続くため「変化動詞」に分類される。この2つの動詞の違いが「一切る」の意味の違いとなって現れる。

また、接辞的な「一切る」について分析するには、もう一つ「疲れる」や「冷える」のような「状態動詞」を設定する必要がある。例えば「疲れる」は「疲れていない→少し疲れている(*まだ疲れていない)→疲れ切る→疲れている」という過程をたどる。これは疲れ切った後に疲れた状態が続くという点では「変化動詞」に似ている。しかし、疲れ切る前の状態を「疲れていない」とは言えない点で「変化動詞」とは異なっている。両者の違いは、「諦める」のような「変化動詞」は当該の変化が始まった時点ではまだ完全にその状態になっておらず、「～し切った」時点でようやく完全にその状態になるのに対し、「疲れる」のような「状態動詞」は当該の状態が発生した時点ですでにその状態になっているという違いがある。「状態動詞」の場合、当該の事態は発生時点ですでに成立し

ており、質的にさらに深まっていく余地のある場合にその限界点を「一切る」で表すのである。

以上のことから、本稿では接辞的な「一切る」を3つに分類し、基本的に前項動詞が動作動詞の場合は「食べ切る」、「走り切る」のように「行為の完遂」を表し、変化動詞の場合は「諦め切る」、「治り切る」のように「変化の達成」を表し、状態動詞の場合は「疲れ切る」、「冷え切る」のように「極限状態」を表すことを指摘する。基本的にと言うのは、「(役柄を) 演じ切る」、「(情景を) 描き切る」、「(意見をきっぱりと) 言い切る」のように前項動詞が動作動詞であっても、質的な深さを述べる場合には意味が転じて「極限状態」を表すというようなことがあるからである。いずれにせよ、このような「一切る」の3つの意味は、前項動詞の意味の違いによるものであり、「一切る」自体は当該の事態が100パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表す表現であると考えられる。この点については李（1997）の考えと同じである。

「動作、行為あるいは変化に限界や到達点が存在して、それが達成される、あるいはそれを行為の主体が達成する。完遂や極限の状態という類別は、前項動詞の性質によって達成される点が到達点か限界かというものと共起副詞との区別によるものであると思われる」（李 1997:227）

接辞的な「一切る」は、「行為の完遂」の場合は対象物が100パーセント消費されることを含意し、「変化の達成」の場合は当該事態の裏の事態が100パーセント消滅することを含意し、「極限状態」の場合は当該事態がそれ以上進展する余地が100パーセントないことを含意する。これらはいずれも残余がゼロになるように切り捨てていくという意味を持つ点で共通し、「切断」や「終結」の「一切る」とつながっている。

5. 「行為の完遂」、「変化の達成」、「極限状態」を表す「一切る」

次に前節で分類した「行為の完遂」、「変化の達成」、「極限状態」を表す「一切る」について順に見ていく。

〔行為の完遂〕

「行為の完遂」は当該の事態を最後までやり残しなく完全に行うことを表す

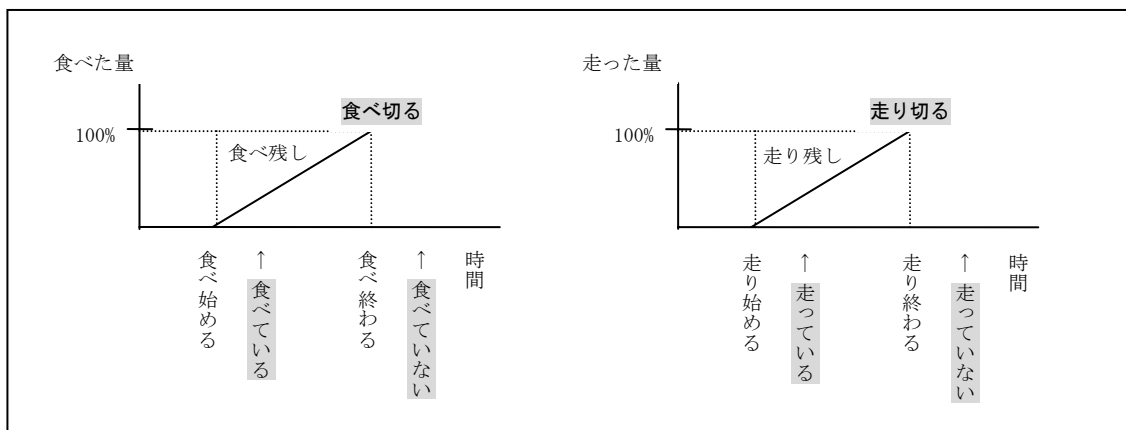
表現で、対象物を 100 パーセント消費することを含意する。それが文脈によって物事を諦めずにやり通すという意味を付随させる。前項動詞には「食べる」や「走る」のような動作動詞が来る。一般に「食べる」は他動詞でヲ格は行為の対象を表し、「走る」は自動詞でヲ格は経過点を表すとして区別されている。しかし、「行為の完遂」という点から見ると、いずれのヲ格も行為達成のための「消費物」を表しているという点で共通する。

(15) 彼は夕食を残さず食べ切った。

(16) 彼はマラソンで 42.195 キロを走り切った。

この「一切る」を図 1 のようなアスペクト体系の中に置くと、終了を表す局面動詞「一終わる」と重なることが分かる。ただし「一終わる」が図の x 軸で表される時間的表現であるのに対し、「一切る」は y 軸で表される事態の達成了を表す表現であるという違いがある。「行為の完遂」は「食べていない→食べている→食べ切る→食べていない」という過程をたどり、「～し切る」までの状態を「～している」と言い、「～し切った」後の状態を「～していない」と言う点で特徴がある。（「一終わる」については廖（2005）を参照）

図 1 「行為の完遂」を表す「一切る」



「行為の完遂」を表す「一切る」には、「走り切る」、「食べ切る」、「やり切る」、「使い切る」、「(シャッターボタンを)押し切る」のような目に見える行為のほか、「(自分の主張を)押し切る」、「守り切る」、「隠し切る」、「待ち切れない」、

「耐え切る」、「(難局を) 乗り切る」のように精神的に諦めずに行為を完遂すること (= 苦難の道を走り切ること) を表すものもある。

〔変化の達成〕

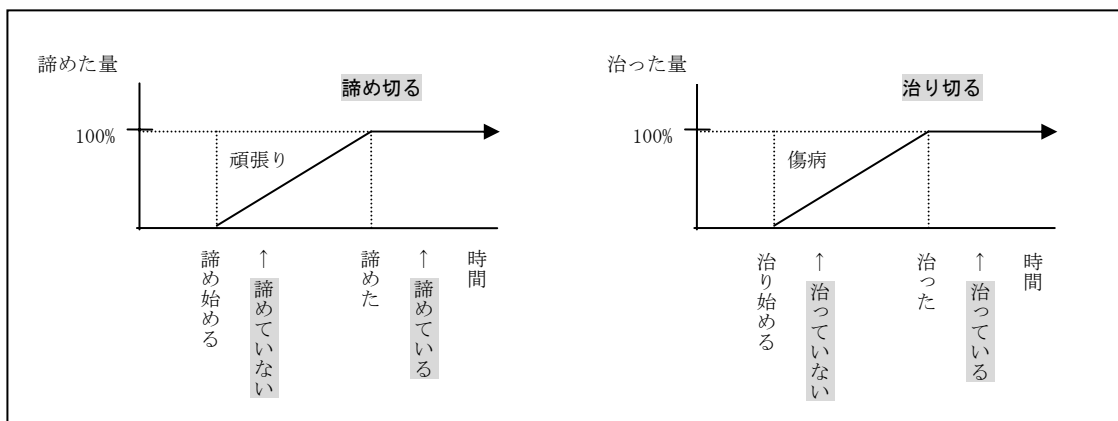
「変化の達成」は当該の変化が最後まで滞りなく生じることを表す表現で、当該事態の裏の事態が 100 パーセント消滅することを含意する。前項動詞には「諦める」や「治る」のような変化動詞が来る。「諦める」の裏の事態とは諦めずに頑張ることであり、「治る」の裏の事態とは傷病が残っていることを指す。

(17) 彼は彼女のことを諦め切ることが出来なかった。

(18) 彼の怪我はすっかり治りきった。

図 2 に示すように、このような「一切る」は先の「行為の完遂」の場合とは違い、「一終わる」では言い換えられない。すなわち、「諦め始める」や「治り始める」は自然に言えるが、「*諦め終わる」、「*治り終わる」とはあまり言わない。「一終わる」については本稿の考察範囲から外れるが、諦め切ったり治り切ったりした後もその状態が続くような場合には「一終わる」が使いにくいのではないと思われる。さて、「変化の達成」は「諦めていない→諦めようとしている(まだ諦めていない)→諦め切る→諦めている」という過程をたどり、「～し切る」までの状態を「～していない」と言い、「～し切った」後の状態を「～している」と言う点で「行為の完遂」とは異なる。

図 2 「変化の達成」を表す「一切る」



「変化の達成」を表す「一切る」には、「諦め切る」、「治り切る」、「信じ切る」、「死に切れない」、「(日が) 暮れ切る」、「(氷が) 溶け切る」、「煮え切らない態度」のように変化の終結点が明確なものが来る。

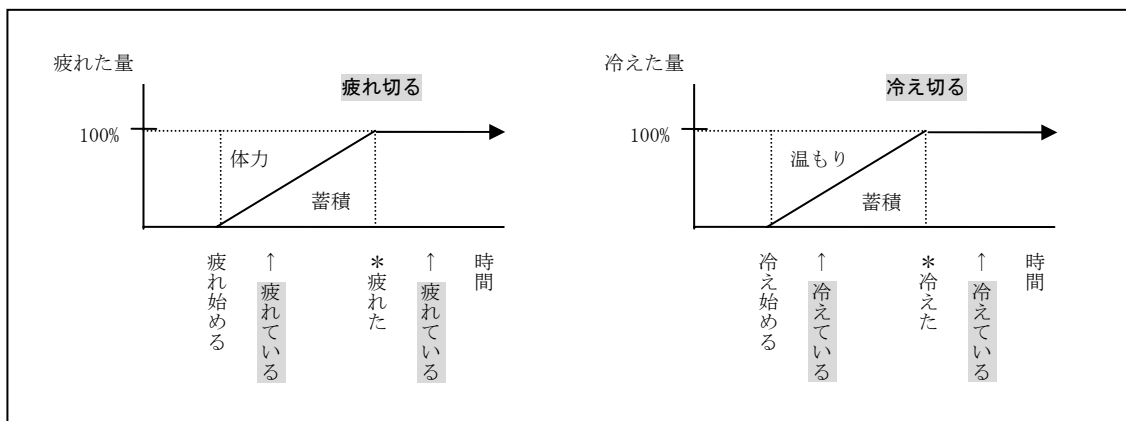
〔極限状態〕

「極限状態」はすでに成立している状態が質的にさらに深まってそれ以上は進まない限界に達していることを表す表現で、当該事態がそれ以上進展する余地が 100 パーセントないことを含意する。前項動詞には「疲れる」や「冷える」のような状態動詞が来る。

- (19) 彼は夜勤が続き心身ともに疲れ切った。
- (20) 彼の部屋は暖房もなくすっかり冷え切った。

図 3 に示すように、このような「一切る」は先の「変化の達成」の場合と同様に、「一終わる」では言い換えられない。すなわち、「疲れ始める」や「冷え始める」は自然に言えるが、「*疲れ終わる」、「*冷え終わる」とは言わない。一方、「変化の達成」の場合は変化が終わった時点で「諦めた!」、「治った!」のように言えるのに対し、「極限状態」の場合は変化が終わった時点で「*疲れた!」、「*冷えた!」とは言わない。「極限状態」は「疲れていない→少し疲れている(*まだ疲れていない)→疲れ切る→疲れている」という過程をたどり、「～し切る」までの状態も「～し切った」後の状態もともに「～している」と言う点で「行為の完遂」や「変化の達成」とは異なる。

図 3 「極限状態」を表す「一切る」



「極限状態」を表す「一切る」には、「疲れ切る」、「冷え切る」、「困り切る」、「濁り切る」、「澄み切る」、「広がり切る」、「太り切る」、「頼り切る」、「(仕事に)張り切る」、「(相手を)なめきる」、「(温度が)下がり切る」のように終結点あまり明確でないものが来る。「部屋が冷え切った」というのは「部屋の温度が下がり切った」ということである。実際には室温はさらに下降するかもしれないが、話し手の気分としてはわずかの「温もり」も完全に消失するほど部屋が冷えたことを述べている。

以上、接辞的な「一切る」は当該の事態が 100 パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表す表現であることを見た。動詞の中には「*泣き切る」、「*病み切る」、「*驚き切る」、「*喜び切る」、「*迷い切る」、「*悩み切る」、「*決心し切る」、「*存在し切る」、「*怠り切る」のように「一切る」とは共起しにくいものもある。これらの動詞も「少し驚く」、「かなり驚く」のように言える場合があるため、必ずしも程度性がないとは言えない。このことから、「一切る」は単に事態変化の達成を表すのではなく、何らかの消費物がゼロになることを含意していると考えられる。逆に言えば、「一切る」が付かない動詞はそれ自体で完結し、上に述べたようなゼロへの変化を伴わないものであると考えられる。

6. 「一切る」の出現頻度

最後にインターネットのウェブ検索をコーパスとして、日常いかなる「一切る」がよく使われるのを見る。検索の概要は次の通りである。

コーパス：インターネットの WWW ページ

- ・ 検索日：2007 年 2 月 16 日～8 月 12 日
- ・ 検索エンジン：goo (<http://www.goo.ne.jp/>) のフレーズ検索
- ・ 検索対象：前項動詞は『日本語基本動詞用法辞典』にある 852 語を含む 1,068 語を対象とした。後項動詞は「一切る」と「一きる」を対象とし、それぞれ「～する、～した、～しない、～しなかった、～します、～しました、～しません、～して」形について検索した。以下の数字はその合計ヒット数を示す。

表1 WWWページにおける「一切る」のヒット数（上位60語）

1	思い切る	258,999	21	冷え切る	34,553	41	頼り切る	12,311
2	締め切る	229,501	22	やり切る	30,484	42	差し切る	11,656
3	乗り切る	225,651	23	守り切る	25,814	43	乾き切る	11,431
4	言い切る	188,862	24	描き切る	25,324	44	渡り切る	10,623
5	使い切る	163,894	25	走り切る	23,497	45	慣れ切る	10,423
6	割り切る	156,760	26	見切る	23,136	46	安心し切る	10,217
7	張り切る	138,025	27	貸し切る	22,786	47	歌い切る	9,759
8	踏み切る	131,166	28	伸び切る	21,867	48	開き切る	9,427
9	断ち切る	84,531	29	煮え切る	21,236	49	上がり切る	8,902
10	打ち切る	76,895	30	分かり切る	20,664	50	下り切る	8,720
11	押し切る	65,512	31	借り切る	19,988	51	腐り切る	8,554
12	疲れ切る	65,290	32	閉め切る	19,006	52	書き切る	7,409
13	入り切る	64,796	33	売り切る	17,466	53	冷め切る	7,305
14	振り切る	58,863	34	抜け切る	15,959	54	勝ち切る	7,174
15	澄み切る	53,595	35	飲み切る	15,530	55	投げ切る	5,815
16	出し切る	53,039	36	泳ぎ切る	14,680	56	生き切る	5,692
17	逃げ切る	50,660	37	決まり切る	14,469	57	生かし切る	5,310
18	食べ切る	39,401	38	上り切る	13,767	58	成り切る	5,093
19	読み切る	38,855	39	噛み切る	13,416	59	治り切る	4,643
20	登り切る	35,381	40	信じ切る	12,710	60	寄り切る	4,287

注) 48「開き切る」は「あききる」と「ひらききる」の合計ヒット数を示す。

50「下り切る」は「おりきる」と「くだりきる」の合計ヒット数を示す。

表1の網掛けの表現は、前項動詞の意味からだけでは推測しにくい固有の意味を持つものである。辞書を編纂する際には個別に意味を記述し、日本語教育でも個別に意味を教える必要があると思われる。日常生活ではこのような「一切る」が多数使われていることが分かる。(彼のことを思い切る、公募を締め切る、夏を乗り切る、意見をきっぱりと言い切る、割り切った考え、張り切って歌う、強行採決に踏み切る、番組を打ち切る、抵抗を押し切る、未練を振り切る、彼の才能を見切る、会場を貸し切る／借り切る、煮え切らない態度、分か

り切った結論、ドアを閉め切って出てこない、決まり切った質問、差し切る：競馬用語、役柄に成り切る、寄り切る：相撲用語)

7. まとめ

以上、本稿では複合動詞「一切る」の意味について分析し、以下の5つに分類できることを指摘した。

〔A〕本動詞「切る」の持つ切断の意味が生きているもの

1. 「切断」：前項動詞で表される手段によって対象を物理的に分断することを表す。

(例) 噛み切る、食い切る、叩き切る、首を締め切る、枝を打ち切る、鼻緒を踏み切る、稲穂を押し切る、退路を断ち切る

2. 「終結」：前項動詞で表される行為によって事態の継続に区切りをつけることを表す。

(例) 番組を打ち切る、申し込みを締め切る、追跡を振り切る、彼の才能を見切る、思いを断ち切る、思い切る、割り切る

〔B〕切断の意味があまり感じられず、接辞化したもの

3. 「行為の完遂」：動作動詞に付いて、当該の事態を最後までやり残しなく完全に行うことを表す。

(例) 走り切る、食べ切る、使い切る、意見を押し切る、難局を乗り切る、耐え切る、待ち切れない、守り切る、隠し切る

4. 「変化の達成」：変化動詞に付いて、当該の変化が最後まで滞りなく生じることを表す。

(例) 諦め切る、治り切る、信じ切る、死に切れない、日が暮れ切る、氷が溶け切る、煮え切らない態度

5. 「極限状態」：状態動詞に付いて、すでに成立している状態が質的にさらに深まってそれ以上は進まない限界に達していることを表す。

(例) 疲れ切る、冷え切る、困り切る、濁り切る、澄み切る、広がり切る、太り切る、頼り切る、仕事に張り切る、下がり切る

このうち〔B〕の接辞化した「一切る」は、従来大きく「完遂」と「極度」

の2つに分類され、アスペクト表現の中に位置づけられてきた。これに対し、本稿ではこれを前項動詞のアスペクト的な違いによって3つに分類した。ただし、「一切る」自体はアスペクト表現ではなく事態の達成量を表す表現である。一般に「ている」の接続の仕方によって動詞の分類を考えることがあるが、本稿では「一切る」の接続の仕方によって動詞の分類を考えることも重要であることを指摘する。

参考文献

- 李暲洙（1997）「中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述：本動詞「切る」と前項動詞「切る」、後項動詞「一切る」と関連づけて」『世界の日本語教育』第7号，国際交流基金日本語国際センター，219-232
- 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって —金田一的段階—」『国語国文』8号，[奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房，85-104に再録]
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』第15号 [金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房，5-26に再録]
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹（1989）『日本語基本動詞用法辞典』，大修館書店
- 定延利之（2005）「日本語の動作動詞と変化動詞」、第1回中日理論言語学研究会
- 杉村 泰（2007）「複合動詞との共起から見た日本語の心理動詞の再分類」『二〇〇七年日語教学国際会議論文集』，東呉大学日本語文学系，427-438
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 廖紋淑（2005）「局面動詞「～始める」、「～続ける」、「～終わる／～終える」と内的状態動詞との共起関係についての記述的研究」『ことばの科学』第18号，名古屋大学言語文化研究会，pp.63-87
- 山田忠雄 主幹（1989）『新明解国語辞典』第四版，三省堂